
アンジェリカ曰く

夏原はとる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンジェリカ曰く

【Nコード】

N7985V

【作者名】

夏原はとる

【あらすじ】

「あたしを好きにだけ組み敷いていいからここに置いてよ」森に打ち伏していた娘は自虐的に嗤いながら言った。男は沈黙した。死にたがりの少女と無口な魔王と彼らを取りまく暢気な生き物達の多分シリラス日常ファンタジー。

少女と嘲笑

「何だつていいのよ。ここに置いてくれるか、あたしを殺すかしてくれるなら。あんたは好きなだけあたしで遊べばいいの」

皮肉気に口の端を歪め、彼女は投げ捨てるように言った。切り破られ、ほとんどないも同然の布切れのようなワンピースの内側から土と痣と鬱血した痕にまみれた細い身体が覗いている。長椅子の上で右膝を抱え、だらしなく、誘うというより己の何もかもを放り出すような体^{てい}だった。彼はその自傷的な有様を見てただ、いつの間にこの人間は起きたのだろうかと、そんなどうでも良いことを考えた。

煮えたぎるような憎悪が消化するとともに、次にはどうしようもない嫌悪と自虐心が浮かんできた。地に這いつくばったまま浅いため息を吐く。殴られた個所よりも蹂躪されたあちこちが痛くて、それからおぞましかった。身体中が穢れ果てて、神様にすら救われなような気分だった。娼婦というのはきつと、とても強い人間なのだと思ひたいな考えが頭を過り、そしてまたため息が出る。しかしそれは弱々しいにも程がある、吐息と変わらないため息だった。覆い茂る木々は暗くざわめき、月には軽蔑されながら嘲笑されるような気までする。刺すような雨が怯懦に震えた手をさらに冷たくさ

せた。

瞼が落ちる。ああ、これで、死ねるだろうか。そんな甘い考えが浮かぶ。死ねるもんかと漸く戻ってきた冷静な自分が鼻で嗤った。目を閉じて、眠りに落ちて、雨に打たれて。身体中は傷だらけ。確かに死ねそうだ。でも死ねない。人間っていうのはそんなに脆い生物じゃない。精神ではなく、肉体の話ではあるけれど。朝が来ればまた目覚めて、また自分が気持ち悪くてたまらなくなる。それからまた、獣に怯えるのだ。冷えきっていく身体を気にも留めず、思考はどんどん皮肉げに回っていく。地べたに転がったまま、彼女は視界が真つ暗に染まるのが分かった。あれ、やっぱ、死ぬのかな。そんな風に思い直した時、その真つ暗が揺れた。泥にまみれた右耳と雨に濡れた左耳がおぼろな音を拾う。じゃり、という靴音と、何か、そう????人の声のような。

「……い、おい。娘。起きろ」

ふるり、と睫毛が震えた。干涸びた喉が喘鳴を洩らす。明らかに弱くひび割れかつ醜い声だった。しかし相手は聞き取れたらしい、続いて「生きているな」とのつぺらぼうな声音で呟いた。

彼女は手を伸ばした。地べたに這いつくばったまま。ぶるぶると震える腕のまま。

「……あ……」

どんな相手だろうが関係なかった。人。人だ。ああ、言いたい、ことが、ある。でも声が出ない。意識もそろそろ落ちそうだ。彼女は唇を噛み締めた。視界がぼやける。落ちる。

寸前、冷たい指が彼女の手を捉えた。

その一瞬後には彼女は気絶していた。

起きた時、彼女は何故か長椅子に寝かされていた。見たこともないような豪華で質の良いダークブラウンの革張りの椅子。目覚めたその場所は薄暗かったが、調度品は一目で良い値がつくと分かる上品で高級そうなものばかりだった。

だがしかし、その時彼女にとって最も重要だったのは、その部屋の中にいたのが長い髪で、黒いローブを羽織った男ひとりだったという一点のみだった。

反射的にぞっと血の気が引き、長椅子から飛び上がり、けれどすぐさま自虐的な笑みが浮かんだ。ばっかみたい。どうせもう穢れ切っているのに、何を怯えているっていうの。

後々考えれば彼女の無意識的な恐怖も嫌悪も当然のことだったのだが、その時の彼女は何もかもが気持ち悪くて、侮蔑の対象で、全て余すことなく捨て去りたいくらいどうでも良かった。

いっそのこと全部壊してもらいたいくらいに。

そう思った瞬間、彼女は片膝を立てて錆び付いた真っ暗な眼差しで男を睨みつけていた。嘲りとそう変わらない下手な微笑を浮かべ、枯れた声で呼びかける。

「ねえ」

男はローブを脱ぐのに忙しいらしく、一拍置くまで彼女が起きたことにも呼びかけられたことにも気付かなかった。しかし数瞬後、

ゆつくりと大きな背が振り返る。陰鬱な闇色の目が彼女を見た。

「あんたは男よね」

彼は不可解そうに眉を寄せながらも頷いた。彼女は嗤った。

「じゃああたしを好きなだけ組み敷いていいからここに置いてよ」
「……………何？」

「好みじゃないならなんか違うこと要求してくれたらいいわ。あんたがあたしで鬱憤晴らして、その代わりにあたしの願いを聞く。そういうのがしたいの」

「願いの？」

そう、と彼女は軽やかに首を揺らした。どうしてだろう。先程まであれほど疲れ果てていたのに、こんなに調子が良くなっている。

「あたしをここに匿うか、あたしをさっさと殺すか。殺すならなるべく痛みのない方法でやってほしいわ」

男は沈黙した。次いで、お前は、と苦々しい声を出す。

「お前は何を言っている。……………そもそも、お前は俺が何か分かっているのか」

「何って」

陰惨で醜悪な笑みが顔中に広がるのが分かった。今までで一番最悪な笑顔だった。だけどそんなことはもうどうでも良かった。は、と吐き捨てる。

「何だっていいのよ。ここに置いてくれるか、あたしを殺すかして

くれるなら。あんたは好きなだけあたしで遊べばいいの」

少女と嘲笑（後書き）

こんにちは、はじめまして。

年齢制限大丈夫だろうかとひやひやしながら頑張ります。楽しんで
いただけたら幸いです。

感想などいただけましたらとっても嬉しいですゝゝゝ

切望する憎悪

ああ、この部屋は窓がないな、と彼女が気付いた時、重いため息が聞こえてきた。言わずもがな男のものである。

決めてくれたのだろうか。それなら良いのだけど。そう思ってみせて、なのに心臓がひやりとした。自分で言い出したくせに、自分で勝手に怯え始める自身が、吐き気がするほど気持ち悪かった。

「……ともかく。お前は、湯浴みをしろ。傷の手当てをその後してやる。痛みと疲労は取ってやったから動けるはずだ。ついてこい」

……………はあ？

彼女はうつかり素で首を傾げた。何この人。人の話聞いてないんだろうか。

「……ちよつと、あたしの、」

「話は後だ。……面倒臭い」

今面倒臭いって言ったんだけど。

とは言え自分の発言がまともな人間には大分迷惑なものだと自覚してはいるので、彼女はしぶしぶ、さっさと歩き出してしまった男の後を追った。ぽすん、と長椅子から降りる。足がふかふかした。そういうえば靴も奪われたので裸足なのだった。

こんな高級そうな敷物の上を、汚れた足で歩いても良いのだろうか。躊躇したが、男が止まらないので彼女はままよとばかりに踏み出し、少しだけ駆け足になった。

男は重そうな扉を開けたまま、彼女がくるのを待っていた。慌てて部屋を抜ける。するとまたさっさと彼は行ってしまう。

廊下はこれまた豪華だった。やはり全体的に薄暗いが、その分重

厚な上品さと豪華な布地や装飾が目立つ。この男は一体どこのお貴族様だ、と彼女はちよつと不安になった。けれどもついと頭を振ってその感情を拭い去る。どうでもいいではないか。もう、何もかも自分が一番、どうでもいいのだから。

「ベルダン、ナーニヤを呼んでこい」

不意に男が声をあげた。するとすぐに「是」という返答がくる。どこにいるのだろうとあたりを見回しても誰もいない。

(……?)

不思議な屋敷だ。

そんな感想を持つていると、いつの間にか金色の髪の毛、猫のような目をした綺麗な女性が立っていた。女中のような服を着ている。使用人だろうか。

「お呼びですか」

「この娘に湯浴みをさせてくれ。森に倒れていたせいで土まみれだな」

「……え？ ですが、この方は」

「どうも死にたいらしい。まあ、だから、問題はないだろう」「は？」

はたから聞いていても意味不明な喋り方だ。言われている女性はもつと意味が分からないのだろう、疑問符を浮かべまくった顔で困ったように彼女へ視線を向けてきた。

目が合った。彼女はただどんよりした冷めた目で女性を見た。

「……承知致しました。このナーニヤ、完璧にこなしてみせましょ

う」

「……………湯浴みくらいでそこまで気負わんでくれ」

最も男の言葉になど見向きもせず、猫の目の女性はそつと彼女の肩を掴んだ。思いがけず優しい手つきだった。

少し驚いて見上げると柔らかい笑みが降ってくる。何故だか無性にやるせないような、いたたまれないような、卑しい気分になつて、なのにどこか安堵してしまう。女の人はいいな、と彼女は思った。女の方は柔らかくて、優しく、怖くない。同じ女の自分とも違って、気持ち悪くもない。いいな、ともう一度、今度は弱い心持ちで思った。

案内された浴場はとても綺麗で、布を挟んだところで、女性が終わるのを待っていてくれた。これ以上この高価たかそうな屋敷の中を汚れた身でうろつくのは忍びなかったので、丹念に汚れを洗い流す。????? 本当の汚れは、洗い流せやしないけど。

髪も洗って浴場を出ると破れかぶれのワンピースは消えていて、白い清潔そうな、だが以前のものと似たワンピースが手渡された。袖を通す。肩より少し先でカットされていて、通気性の良い感じがなんとなく爽やかだった。

ナーニヤと呼ばれた女性は嬉しそうに微笑んで手を叩き合わせた。

「ああ、良かった。ぴつたりですね。よくお似合いですよ」

言われた途端、途方もない罪悪感が頭をもたげてきた。彼女は俯いて、綺麗なワンピースの裾を掴んで、ぼそぼそと呟く。なんですか？ とナーニヤが聞き返す。彼女は繰り返した。

「……………ごめんなさい……………」

ナーニヤは凍り付いたように猫の目を見開き、それからどうしてだか哀しげに首を振った。いいえ、謝ることなど何一つないのですよ、と痛そうな声で囁きながら。

ナーニヤに連れていかれた部屋は先程と少し様相が違っていた。相変わらず暗色だが、いささか小さめで、大きな寝台がひとつ、部屋の中央に座している。男はその寝台に腰掛け、分厚い本をめくっていた。彼女は暫く何も言わず、男が顔を上げるのを待った。少しして紗のような髪の狭間から覗く瞳が緩慢に瞬き、面が上がる。

「……ああ、終わったのか。声をかける。気付かなかった」

どこか呆れたような言い方だった。彼女は無言のまま男の方に近づく。ちらりと寝台を見て、唇をそつと噛み締めた。

「言われた通り、洗ってきた」

「……見れば分かるが」

「あんたは決めてくれたの」

男は面倒そうに息をついて、ゆっくりと立ち上がった。長身の彼

が立つと彼女は思い切り見上げる姿勢になるのでかなり恰好がつかない。けれどもここで劣勢になるわけにはいかなかった。

「お前を今直ぐ森に捨てるという選択肢もあるんだがな」

表情のない声は、それが一番良いと思っているようにも聞こえた。その可能性は考えなくてもなかったから、彼女は男からさりげなく目を逸らして言った。

「それなら痛くなく殺してよ」

「……何故俺がお前の命の責任を負わねばならん。御免被る」

「だってあんたが拾ったんでしょ」

間髪入れずに彼女は噛み付いた。ぎり、と奥歯を噛み締める。男が不可思議そうにするのが目の端に映った。自分でもむちやくちなことを言っていると分かる。この男が拾おうが拾わなかつても、ともかく明日までくらいは生きていただろう。それでも今、自分がこの世で一番けがらわしいと思う生き物自分がこうして生き延びているのが、彼のせいに思えてならなかった。????いや、彼のせいにしてしまいたかったのだ。

最低だな、と自分でも思った。だけでも止まらない。あの時、見捨ててくれと言えたなら。いいや、いや。声が出ていたなら。

死なせてって言えたのに。

「あんたが拾ったの。あんたがあたしなんて生き物を生き延びさせたの。だからあたしはあんたに頼んでるの」

だから、もへったくれもなかった。穴だらけの理窟だ。だけど男は思う所があつたらしい、諦めたようにまたため息をついてから、

長い腕を伸ばしてきた。頬に触れる。びくりと肩が揺れ、彼女は一瞬で青ざめた。

「……お前は。そのような目にあつた身で、何故さらに自傷するよ
うなことを望む」

彼女の当初の姿で何があつたのか、彼はおぼろげながらも察しているらしい。当然かもしれない。それぐらい、確か、自分は酷い恰好をしていた。

（何故？）

自嘲する。自虐する。

そんなの、決まってんじゃないの。

「この世で一番あたしはあたしがおぞましくてけがらわしくて気持ち悪くてたまらないからよ」

ぐつと両腕で自分の身体を抱きしめ、奥歯を鳴らした。気持ち悪かった。気持ち悪くてたまらなかった。汚れている。穢れ切っている。複数のいやらしい手で指で口で触られ痕をつけられ蹂躪され。無我夢中で逃げてきて。

だけど逃げて残つたのは何だ。このけがらわしい生き物は何だ。

「ぜんぶ、壊れちゃえばいいのに」

もう嫌だ。きらい。男も、自分も、人間も。みんな。

（こわい）

頭が痛い。視界がぐらぐらしてきた。男の目は変わらず陰鬱に彼女を見る。

「分からんな。殺せ、という要求の根底は理解できたが、何故関係を望む。余計、嫌になるのではないのか」

どうして、と言われれば、これもただ自分を痛めつけたいだけに過ぎない。けれども彼を納得させられる理由も、他にあるような気がする。暫しの間考えて、噛み締めるように一音一音はつきり発音する。

「……あたし、知ってる。合意の上ならおかしいことじゃないんでしょ？ あんな、踏みにじられるようなことは、違う。だから、塗りつぶすの」

劣勢ではなく優位を。

下位ではなく対等を。

ずたずたにされた精神のまま、男の姿を見ただけで怯えないようになるには、それぐらいの上塗りが必要な気がした。つたないつたない考えた。けれどもこの時の彼女は相当駄目になっていて、それが最も良いことのように思えたのだ。

男は目を眇め、なるほど、と言った。次の瞬間、緩やかに腰を引かれた。

「ならば望み通りにしよう」

漸く彼は彼女の言葉を受け入れたのだった。

淫蕩な朝（前書き）

軽い性描写を含みます……苦手な方はすみません、スルーでお願い致します。

淫蕩な朝

当然のように寝台に仰向けに寝転がされて、彼女は茫然と男を見上げた。驚いたのは行為の予兆ではなく、男の髪の色だった。

あまり気にしていなかったが、彼の髪は溶けるような淡い、青みがかった黒で、さらさらと闇が落ちるように彼女の上にこぼれてくる。

（夕闇の色だわ）

瞳は緑がかったような、どこか陰鬱な闇色をしているのに、髪の色はとても優しい夜の入りの色だ。

ふ、と男が覆い被さってくる。そろりと腕から頬を撫でられた。ぞわりと肌が粟立つ。一瞬無様にも泣きそうになって、けれどすぐに、どうでもいいような気分になる。もう、良いつて、決めたじゃないの。そういう風に。

「あつ……」

ぴり、と首筋を痛みが走った。噛むようにくちづけられ、鎖骨に降る。

「あ、あ……ん、む」

黙れ、と言うように唇が重ねられる。貪るように深くくちづけは一瞬の恐怖を打ち消すまでゆつくりと、宥めるように続いた。だんだんと意識が朦朧としてくる。はたりと腕が敷布に落ち、全身の力が抜けた。気を失おうかと試みた丁度その時、ごくなにげない仕草でワンピースの裾をはだけられた。するりと脱がせられ、手の届か

ないところに捨てられる。綺麗な服だったのに、と少しばかり申し訳ない気分になった。男の呼気が直に肌に触れ、その無骨な手が慎重に下着へ伸びた。自分の意思と関係なく羞恥がこみ上げてくる。

「……っは、あ」

あっという間に裸に剥かれ、腹にくちづけられる。それは滑るように胸元までのぼっていき、頂を含まれた。びくんっ、と身体の仰け反る。

「や、あ……っん、ああ！」

ややわわと胸を揉まれた。身体中が痙攣する。嬌声が無意識にはみ出る。落ち着けと促すようにまた深くくちづけを降りてくる。高く水音が鳴って舌が絡み合った。かたかたと震える彼女の背骨から撫でるように男の指が這い降りていき彼女の身体を味わっていく。

ふと、彼は眉をひそめた。けれども彼女はそれに気付かず、泣く寸前の声で喘いでいた。そろりと彼を直視しようとするやと薄く色づいた胸を食まれて、再び甲高い声が出る。舌先で転がされ、意識はさらに白濁していく。そんな中、男の声がふつと耳に飛び込んできた。

「……本当に、よく分かん娘だ」

愚痴をこぼすように言って、彼はその娘の腕に赤い痕を刻み付けた。

窓一つない部屋の中で、彼女は鳥の鳴き声を聞いて目を覚ました。一糸纏わぬ姿のまま、敷布をたぐり寄せてゆるゆると瞬く。ああ、と吐息が洩れた。

ああ、また、朝がくる。

「……起きたか」

彼女は声がした方に目をやった。身体が泥のように重い。昨夜の静かな、そしてどこか冷たい責め苦のせいであるのは明白だった。男は縞模様の壁に寄りかかり、偉そうに腕を組んでいた。鬱々とした目がじろりと彼女を捉える。

「……最後まで………されていないようだったが」

何を言われているのかはすぐに分かった。彼女は嘲笑う気力すら沸かなくて、ただ吐き捨てるように言った。

「関係ないわよ。汚されたのには変わらないんだから」

触られたことがもうおぞましい。点滅するように悪寒が走る。思っただけで吐き気がする。気持ち悪い。

寝台の上で気怠く頂垂れる少女の姿を暫く眺めていた男は、空気

を変えるように口を開いた。

「約束通り、ここに置いてやる。身上は……俺の玩具、ということになるだろう。ふん、外聞が悪いにも程があるな」

忌々し気に舌打ちして、それで、と彼は続けた。

「お前、名は何と言う」

彼女はきょとんと、ここにきて初めて何の含みもないまっさらな顔になった。

名前。

あたしの、名前は。

(……あれ?)

口の中がからからした。頭痛が酷くなる。名前。あった、はずだ。つい数日前まで呼ばれていた、はずだった。だけど、何て?

自分は何と呼ばれていたのだ。

彼女は茫然とした。思い浮かばなかった。綺麗さっぱり忘れている。まるで洗い流したように。……身の汚れの代わりに、名前を。

「おい?」

不審そうな声が早く名乗れと促してくる。けどどんなに頭を捻っても浮かんできてはくれなかった。ほろりと零れる。

「分かん、ない」

「……………何?」

「なんか、抜けて、る」

「……………何の冗談だそれは。名前だけ忘れるだと？」

そんなことあたしが聞きたい。彼女は慄然となった。だって分かんないんだもん、と口の中で呟く。男は何事か考え込むように黙り込んでしまった。

けれども暫くして、彼はその闇色の不思議な虹彩を持った双眸を押し上げた。

射抜かれる。

何故だかそのように感じた。

「?????アンジェリカ」

低い、透徹とした声だった。色を持たず、冷徹で、事務的な、けれども深く浸透するような柔らかな甘さを持った声だった。壮絶な矛盾。彼女はぼうつと男を見た。見ながら、このひとは本当に、綺麗な、とそんなことを思った。男なのに、何故だか怖くは感じなかった。無茶な願いを呑んでくれたからだろうか。

「お前はアンジェリカだ」

ようやくと、彼女は理解した。アンジェリカ。ひとの名前。それが名前。あたしはアンジェリカ。

あたしの名前。

彼女は思わず重い身体を引きずり、寝台を這おうとした。けれども男と目が合って牽制される。ごくりと生唾を呑み込み、彼女は留まった。代わりに問う。

「あんたの、名前は？」

男は少々驚いたように瞬いた。名前を聞かれるのがそれほど珍しいことなのか。男ははじめて笑った。微かに唇の端を引き上げ、冷たい印象を与える漣のような笑み。

「シキ。この屋敷の主だ」

シキ、と彼女はその名前を舌先で転がした。忘れないようにしよう。何故かそう思った。

「何か用があればナーニヤカベルダンを呼べ。暇なら屋敷をうろついても良い。屋敷の者に迷惑をかけない程度、好きにするがいい」

素っ気なく言いおいて、彼はさっさと部屋から出ていった。

彼女はぱたんと扉が閉まるを待ってから、ふと首を傾げる。シキ。不思議な音の名前。しかしそれ以上に、どこぞで聞いたことがあるような気もした。

「……なんだったっけ……」

気になるが、自分の名前すら忘れているのだ、どうせ思い出せない。彼女はため息をついて、とりあえず服はないのかな、とずうずうしいことを思った。

よるべなき名を抱く

部屋を出た男は深い深いため息を吐いた。はー、とそれはもう地獄の底から響くような重苦しいため息だった。

妙なものを拾ってしまった。

げっそりしながら今朝方まで共寝した娘のことを思い出す。恐らく女性に対して最低の辱めを受けたのだろう哀れな娘だったが、衝撃のあまりか生来の根性がねじ曲がっているのか、色々間違っている気がする。

というか。

(……処女ではないか)

彼は通路のど真ん中でずーんと暗くなった。まだ年端もいかぬ娘を良いように弄ぶのは本意ではなかったし、それこそ情事の何たるかも知らぬ気な少女をいたぶるのも本意ではなかった。かなり胃が痛い。

再び重いため息を吐いた時、悲鳴じみた怒鳴り声が後頭部に直撃した。

「シキ様ああああああ！ あ、あ、あなた、あなたは何と云うことを！」

……煩いのがきた。

彼はもつとげんなりした。いやいや振り向く。そこには羊のようなもつさりくるくるした薄茶色の髪を振り乱した側近の姿があった。思った通りに。

「ベルダン、朝から何だ」

「何だ、じゃありません！」

ばん！ とベルダンは壁を粉碎する勢いで強打した。ぐわつと上げた顔は涙でぐしゃぐしゃになっている。良い年した男のそんな顔は見たくない。見苦しいにも程がある。

「あ、あな、あなたと言う人は、恐ろしい目にあつたばかりの女性、しかもまだ年端もいかない少女に、ななな、なんという、卑劣なっ」

「……落ち着け」

「落ち着いていられますかっ！ このベルダン、シキ様にお仕えして幾千年、そのような駄男にお育て申し上げた覚えはございませんよ！」

「……そもそも幾千年も生きとらんだろうが」

大分錯乱しているらしい。シキは頭を抱えた。頭痛がする。

しかし生真面目で錯乱中の側近はまだまだ続ける。

「それは、それはまあ、あなたももう良い歳をした男、ぐらりときてしまった気持ちは、まあ、汲んで差し上げなくもございませんが、ですが今まで女性にはさしてそのような目を向けられたことなどほぼありませんでしたのに……！ よりにもよってこんな無体な！

最低です不潔ですゴミ屑です！ はッ、まさかシキ様、あなた、まさかシグルト様のような幼女趣……？」

「……………少し黙れ。お前は俺を何だと思っている」

シキはいつそ意識をなくしてしまいたかった。何が嬉しくて自分の屋敷の廊下でこんな阿呆な疑いをかけられねばならんだ。

「……俺だってなんとか説得しようとした。だがあの娘も大分……」

壊れていたからな」

静かに切り出せば、ベルダンは思わずというように口を噤んだ。痛ましく感じたのか、眉根が寄っている。

「取引でなくてはあの娘は今も怯えていただろう。いつ、自分の意思を奪われ捨てられ、拳句の果てに卑劣な目に合わされるか、と。ああしないと今日にも自刃していそうでもあったのだ」

ざらついた眼差しは昏く、憎悪と嫌悪と恐怖と擦り切れそうな自我で漸く踏みとどまっているようだった。

(……哀れな娘)

陵辱される女達は、今の時代、そう少なくはない。けれどもだからと言って割り切れることでもない。ましてやあの幼さでそのようなことをされては、発狂しただけかもしれない。

……幼いと言えど、人間の女だ。だが紛れもなく彼が掬い上げた命だ。彼の目の前で尽きようとしていた子供。

自刃などされてはたまらない。この屋敷は決して彼女にとって楽しいものでも癒しになるものでもなかっただろう。それでも一切れの救いめいた柔らかなものが見つかるかもしれないのだ。

アンジェリカ。

名付けたのは、気紛れだ。ただ。

あの闇の中でなお燐光を帯びる白髪と、暗く染まった金の瞳が妙に??眼球の裏側まで、灼きついた。

天使のような娘。

皮肉な名をつけたものだ、と微かに自嘲する。だが彼女にはひどく似合っていると思った。

「……しかしですね、シキ様」

ふと、冷ややかな声が刺した。

「……………あの少女に、欲情はしたのでしょう」

疑問ではなく断定だった。冷たい目が輕蔑するように眇められている。

「……………」

「煽られたんでしょう」

「……………」

「……まさか最後まで、」

「してない！ もうその下品な口を閉じろ！」

「下劣はどちらですか！ ちょっとは反省してください！」

ぶち切れたらしいベルダンの説教は昼前まで続いたのだった。

「ほんとに殿方というものは…………っ！」

猫のような目が殺気立って全身の毛を逆立てる猫のようにぎらぎらと光っている。

しかしアンジェリカに触れる手は驚くほど優しい。そっと、絶対に傷つけないようにしているように感じた。綺麗で温かい手はそろりと彼女の髪を掬い、ゆっくりと、脆い子供にするみたいに、柔らかに梳いてくれる。

「……え、と」

ナーニヤ、さん、と呼びかける。間違っていたらどうしよう。密かにはらはらしていた彼女に向かって、ナーニヤはにっこりと微笑んだ。はい、なんでしょう、と優しく。

「……あたしのことは、放っておいても大丈夫、なので」

何しろ押し掛けて欲しいものをふんだくっただけの人間なのだ。こんな風によくしてもらう理由なんてない。今朝も湯を貰ってしまった。

と、ナーニヤは哀しそうに眉根を寄せた。

「ご迷惑でした？」

「えっ、そんな、こと！」

「まあ、良かったですわ。それでは次に足を出してくださいませ」

「……………あれ？」

何か今おかしかったような。

あれ？ ともう一度首を傾げつつ、アンジェリカは言われるままに足を出してしまった。引っ掻き傷や、裂傷に白くとりとした薬を塗られる。ひゃっとして彼女は首を竦めた。冷たい。

「ごめんなさい、我慢してくださいませね」

ぶんぶんっ、とアンジェリカはナーニヤの言葉に大きくかぶりを振った。するとナーニヤは微笑して、最後にアンジェリカの傷痕を一撫でした。

「はい、もう大丈夫ですよ。いいですね、よく我慢できました」

……いいこ。

アンジェリカはとてつもなく微妙な表情になった。この女性は一体自分のことをいくつだと思っているのか。

そんな彼女の心中には全く気付いていないらしい、ナーニヤはここにこと尋ねてきた。

「アンジェリカ様。何か欲しいものはございますか？」

何でも持つて参りますよ、と笑う彼女の台詞に、アンジェリカは一瞬息を止めた。まじまじと彼女を見つめる。

「……どうして、知ってるの？」

「お名前のごことでございますか？ それでしたらシキ様にお聞きしましたので。……とてもお似合いですよ」

猫の目をふんわりと細める彼女は、きつとその前後の話も聞いたのだろう。アンジェリカは心許ないような、どうすれば良いのか分からないような気分になって、ちよつと俯いた。アンジェリカ。あたしの名前。あたしはアンジェリカ。シキに貰った名前。あたしの存在を示すもの。

「アンジェリカ様？」

ナーニヤが心配気に覗き込んでくる。その表情で、アンジェリカは一番言わなくちゃいけないことを思い出した。百万の勇気を振り絞って、あ、と声を引き出す。シキの寝台がぎしりと軋んだ。窓のない部屋。上品だけど、暗くて、どこか陰鬱。

その中で、ナーニヤだけは柔らかな日溜まりのようだった。

「……あ、り???が、と」

へたくそな感謝だった。ただと言われたナーニヤはびっくりしたように目を瞠って、それから至極嬉しそうに笑み崩れた。今までで一番、ほっとしたような顔で。

懊悩する羊と猫

ひとまずアンジェリカを部屋に残し、彼女は何か軽い菓子でも、と廊下に出たところでベルダンとぶつかった。

「つと、ああ、すみません！ 大丈夫ですか、ナーニヤ」

「ええ、こちらこそ。申し訳ございません」

ナーニヤの言葉にほーつと安堵の息を洩らすベルダンの、どことなく疲れた様子に、長年ともに過ごしてきた彼女は彼がこれまで何をしてきたのか、だいたいのところを悟った。ちよつと苦笑する。

「シキ様を叱りつけておいでですね？」

「はい、まあ。……本当に、他にも方法を考えられなかったのか……我が主ながら情けない」

「異論はございませんわね。シキ様ったら、アンジェリカ様の傷を診るのも忘れていらっしゃったのですよ。本当に、これだから殿方は」

言いながらだんだん彼女も腹が立ってきて、もう、と手を当てた頬を膨らませた。本当にどうしようもない。……シキ様だけが悪いというわけではありませんけど、それでもちよつと配慮が足りませんわね。

思っただけ息をついた時、ベルダンが気遣わし気に聞いてきた。

「……それで、アンジェリカ様のご様子は」

「あら、お名前を……」

「さっきシキ様に教えていただきました」

なるほど、怒りつつ把握していない情報を吐かせたのか。

ベルダンにはシキの近侍が主な仕事だが、屋敷の空気と気配をある程度把握している。だから大まかには何があったのかを知っているだろうが、細かな、たとえば名前などと言ったことは知らないはずだった。

それはともかく。

ナーニヤは重苦しく臉を伏せた。

「陵辱された女性には少なくない心理でしょうが……ご自分のことを、けがらわしい、と厭われていらつしやるようです。アンジェリカ様は何も悪うございませんに、……悪いのは全て、相手の悪漢どもでしょう」

悔し気に言うと、そうですね、と痛い声で返事がくる。ナーニヤはなおも考える。アンジェリカは、表向き、まるで自分を捨てるような言動と振る舞いを??特にシキには??しているようだが、彼女は怯えてもいるのだ。おそらく、自分で自覚している以上に、ずっと。

シキがどうして平気かは分からないが、他の男を見るともしかすれば倒れてしまいかもしれない。どんなに気丈であつても無意識というものはときとして己の望みを上回つて自衛する。

「……しかし、この屋敷は、彼女には余計に酷いかもしれません。私達は当初の彼女を見ているので、どうも警戒心が沸きませんが、」
「警戒心なんて!」

ベルダンが考え込むように言った言葉にナーニヤは思わず非難するように叫んでしまった。だがすぐにその意見は最もなのだと思い直す。そう、あんなに幼く、怯えた小さな獣のような娘だけけれど、それでも人間なのだ。自分達はともかく、この屋敷の者達は少し、

いや少しどころかなかなり彼女を脅かしてしまうかもしれない。ナーニヤは青ざめた。これ以上あの少女の傷を増やすことなんて許されるわけがない。

「少しずつ、言い聞かせていくしかありませんね。それと、彼女の方の感情も問題です。私達が何もせずとも、もっと怯えさせてしまいかもしれませんか……」

言葉を選んだらしいそれに、ナーニヤははっと口許を覆った。そうだった、そういう問題もあったのだ。彼女は悩む同朋と目を見合わせて、深い苦悩のため息を吐いた。

アンジェリカ。あたしはアンジェリカ。

彼女は幾度も、己に染み込ませるようにその名を繰り返した。寝台の上でぎゅうと丸くなる。今日も質素な白のワンピースは風通しが良くて、少しだけ自由で、少し心許ない。耳を塞ぐようにして甦る不快感を堪える。はあ……と荒い息をして、彼女は何とかその忌まわしい記憶を押し出した。

代わりに昨夜のことを思い出す。静かな、熱。決して無理強いされたわけでも、辱められたわけでも、劣勢だったわけでもない。心は凍って、自傷的に自虐的に、厭わしい自分がもつと傷つくことを

願っていた。だからといって快いものでもなかったけれど。

(……どうして)

一夜明け、少し冷静になった頭にふつと疑問が浮かびくる。無茶を言つて無理を通させた相手は、けれど、精神の根底で恐れを抱く彼女に対し、??優しくかった、ような気がする。

触れる熱が、手が、息が、宥めるように。とても慎重に、……大雑把な言い方で、『優し』かった。恐怖がなかったわけではない。たとえ恩人相手でもやはり彼女は怖かったし、喉が引きつるような感覚も、あった。だけど今まで彼女に触れたもののなかで、あの男が一番、彼女を尊重するような触り方だった。……気のせいかも、しないけれど。

彼女は寝台からそつと降りた。意味はなかった。導かれるように歩く。足は何故か姿見（鏡）に向かった。男の寝室にもこんなものがあるんだな、と少々意外に思う。

綺麗に磨かれた鏡面を見て、アンジェリカはつと喘いだ。

「……あ……」

痕、が。

首筋や上腕部、肘、鎖骨。赤い花が散っていた。……どれが、昨夜のもので、どれが、おぞましい証か。アンジェリカには区別がつかなかった。羞恥よりも失望めいた感情が沸き起こる。

「これ、消えないのかな」

首筋の痕をなぞり、彼女はぱつりと零した。触れるだけでぴりりと幻痛が舞い戻るようだった。

『さーあー、どうだろーね?』

アンジェリカは目を剥いた。同時に硬直する。今の声はどこから。慌てて周囲を見回すも何も見てとれない。相変わらずこの部屋にはアンジェリカひとりだ。けれども確かに声はしたのに。

『そっちじゃあないよ、新入りさん』

くすくすと軽やかで無垢でだが嘲りに似た笑声が響き渡る。ぐわん、と耳の奥で広がるような声。

「……っ、なに」

『さつきはちゃああんと見てたじゃーん。こっちだよー』

……さつき?

アンジェリカは困惑して、視線を鏡に戻した。無意識だった。けれどその判断は正しかったらしい。彼女は目を見開いた。

『んふっ、あたり!』

道化のような顔の少年が、鏡の中から飛び出した。

騙る道化と天使の記憶

一瞬のことで、動きすら見えなかった。

思い切り首を掴まれ、その勢いのまま背中から転倒する。したたかに打った後頭部が痛い。

「……！」

「あはっ、あのヒトの寢室にいるなんて君ナニモノ？ まさか侵入者？」

ぎり、と首筋に鋭い痛みが走る。息ができない。朗らかで残酷な少年の声。のしかかられて、いる。混乱しながらも彼女は必死に目を凝らした。

へろりと曲がつた角のような先を二つ携えた色鮮やかな帽子。被っているのは少年だ。顔半分に、左眼を中心にして星形が描かれている。その双眸がうつそりと笑みを作り、彼は楽し気にアンジェリカの首を締めた。声にならない悲鳴が喉元から滲み出る。

「あぐっ……」

「高位魔族じゃあ、ないよねえ。なあんかよわっちいし。おっかしいなー、そんなかるつと侵入出来るような結界じゃないんだけどな」

少年は馬乗りになったまま、繰り言のように零して、アンジェリカの首を掴む力を強めた。身動きが取れない。膝で腕を踏みにじられる。

「????ぞわり、と背筋を悪寒が走った。」

どくどくと瞬く間に心臓が駆け始める。冷や汗が滲んで、吐き気がした。気持ち悪い。圧迫される首元よりも、この、姿勢。どっと押し寄せてくる記憶に呼び起こされた恐怖と嫌悪とが混じりあって濁った感情が爆発する。

いや。いや、いや、いや、いや。嫌だ。この、姿勢、だけは。いや。既視感などという生温い感覚ではない。ぶるぶると全身が震えて、今少年が何を言っているのかも理解出来ない。気持ち悪い。嫌。甦るのは、ああ、触れる、手、指、熱。かかる息。下卑た笑い声。びりびりに破かれる衣服。叫び声も塞がれた。いやだ。やめて。あたしに。

触るな。

「……ん、あれ？ 君、まさか……？ ？ ？ ？」

彼が何か言いかけた時には、アンジェリカは凄絶な悲鳴をほとばしらせていた。

シキがその断末魔のような悲鳴に耳をつんざかれたのは、丁度一仕事終えたばかりのところだった。ぎよつと眼を剥き、娘がいる筈の部屋の方を振り返ってしまう。数少ない配下達は驚いたように顔を見合わせている。それも聞いたことの無い声だから余計動揺しているのだろっ、声の方に行った方が良いのかどうか、まごついた様

子で戸惑っている。シキはため息をついた。どうやら娘に何かあったようだ。何かは不明だが。そのような考えるまでもないことを思ってから、彼らを振り返る。

「少々席を外す」

ざわつく彼らをおいて、シキはアンジェリカがいるはずの寝室に向かった。

「っ、あ、あああああああ！！」

「えっ、ちょ、いきなりどーしたのさ！」

アンジェリカは非ん限りの声で泣き叫んだ。めちゃくちゃに両腕を振り回す。何とか少年の下から抜け出そうと無意識にもがいた。爪を立て、頭が痛くなるほど叫ぶ。

「ちょ、ちよつとちよつと、ってあいた！」

頭の中は真っ黒だった。ガタガタと歯が鳴り、否応なく喉が枯れるほどの声がほとばしる。獣のように彼女は暴れた。腕だけでなく足も総動員させて足掻き、めちゃくちゃに少年を攻撃する。錯乱して、荒々しく扉が開いたことにも気付かなかった。

「あんれ、ナーニヤ？」

「パレル様?! 何をなさって……………アンジェリカ様!」

ああ、ナーニヤさんの声だ。頭のどこか冷たい片隅が呟いた。けれども恐怖は薄れない。身体が熱くて底冷えする。その矛盾。がんぜない子供ですらもつとまともに訴えるだろう。しかしアンジェリカは止まらなかった。止まれなかった。嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ。悪意の固まるような感触。怖い。いや。

「パレル様、アンジェリカ様をお離しくださいませ!」

「え、知り合い？」

「お願い致します、早く! その方は……………」
「……………何の騒ぎだ」

低い声がナーニヤの台詞に被さるように割って入った。闇色の双眸。その暗い眼差しが一瞬、驚愕したようにアンジェリカを捉える。シキ。

混濁する視界の中、彼女はその瞳を見た。だんだんと意識が薄れていく。完全に気を失う寸前、どつとその願いが胸から溢れる。シキ。

シキ、シキ、シキ。

ねえ。

あたしを、

「?????パレル。その娘から離れろ」

殺してよ。

喉がからからして、身体中が何だか痛かった。塩辛い味が口内に沁みる。瞼がぱりぱりして開けられない。だけどふつとその目尻に、何かとてもやわらかいものが触れた。そつと、慎重に、なだめるような。それはとても優しく、ささくれだった自分でさえ素直に心地良いと感じるようなものだった。冷たくて、少しあたたかい。綿毛の涙のような感触。ひぐ、と喉が引きつって、酸っぱい味がこみ上げた。するとそのやわらかなものは頬に滑り、何かを掬いあげてから、ふわりふわりと髪に触れた。砂糖菓子にだってこれほど忍びやかに触れはしないだろう。ああ、これは一体何だろうか。

そう思った時、彼女はふつと目を覚ました。

一瞬前の夢はさざなみのように揺れて薄れていく。ぱちり、と瞬き視線を巡らせ？？？最初に視界に飛び込んだのは、半分を星形に塗られた顔だった。反射的に悲鳴を上げかけると、彼は慌てたように両手を振り回した。

「わーっ！ 待って待って！ もう何もしないから！ ごめんねえ、さっきはちょおつと勘違いしちゃってさ」

本当に申し分けなさそうにぱんと両手を合わせて謝られ、彼女は大人しく口をつぐんだ。まだあまり意識がはつきりしていなかった

のもある。しかし本能のようなものなのか、未だ警戒は解けない。横たえられた寝台の、敷布を引き寄せてじりじりと後ずさる。少年はしゅんと肩を落とした。

「てつきりあのヒトをたぶらかしにきた淫魔か何かか、それとも普通に暗殺者なんかかと思ってねえ。君の匂いも気配も全く馴染みなかったし。早とちりしちゃったよ。本当にごめんねえ」

その言葉に、幾分彼女は冷静になった。ふるりとかぶりを振る。自分も反応し過ぎたと思う。……喉を掴まれただけなら良かったのだけれど。あの、体勢が。あれが駄目だった。自分の意思とは無関係の場所で拒絶反応を起こし、不意を突かれ、甦った記憶に刺激されてしまった。劣勢の、あの、悪夢を。

「……もう、良い。けど、あんた、誰？」

「僕は『騙り部』だよ。名前はパレル。種族は色々ごっちゃになってて混血っていうかも意味不明状態だから勘弁してね。って言うても分かんないかあ。いちおう聞くけど、君、人間だよねえ」

アンジェリカは眉をひそめた。どういう質問だろう。アンジェリカの暴れっぷりがあまりに酷かったからなのだろうか。いまいちよく覚えていないのだが。

「人間、だけど……？ シキ達だって、そうでしょ」
「はれ？」

不服を込めて言っただけだが、少年はびっくりしたように飛び上がった。まじまじと大きな両目で穴が空くんじやなかったくらいに見つめられる。……何だというのだ。居心地悪い。

「……なに」

「君、もしかして知らないの？」

あんれー？ と彼はなお不思議そうになる。それからいっと笑った。

「ちゅちゅちー。違うんだなあ、これがあ。あのヒトは魔族の中の魔族、偉大なる魔王の一族フルベ家に名を連ねる、現、」

うひひっ、とまさに道化の如く。

パレルはアンジェリカの金の瞳を覗き込む。一定の距離を保ち、しかしその星形の内の双眸が面白気にきらめくのが分かるほどの位置で。

「我らが現、魔王陛下さ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7985v/>

アンジェリカ曰く

2011年10月9日13時27分発行